



Title	観光創造の他者論：「他者との出会い」の観点から
Author(s)	山田, 義裕
Citation	北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会, 「観光創造学を考える」研究会録. 2013年11月23日, 24日. 北海道大学遠友学舎., 110-130
Issue Date	2014-07-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56563
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	proceedings
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	09_yamada.pdf (資料)



[Instructions for use](#)

現在の研究の関心

0 言語学／コミュニケーション論

・Generative Grammar(生成文法)

・A Theory of Mind(心の理論)

1 ポスト虚構の時代のリアリティについての研究

2 拡張現実の時代のツーリズムの領域横断的研究

1

他者と出会う
～観光創造の他者論～
山田義裕
2013年11月24日

観光/旅とは往還を通じての他者との出会いである

観光の旅とは「異民族・異文化との出会い
の中で新しい自己を見いだす」ことである。

神崎宣武

4

他者と出会う

- 今日の発表の目的:
 - 1 「人間にとって旅/観光とは何か」という問題を「**他者との出会い**」を切り口に考える。
 - 2 「他者との出会い」をキーコンセプトとする観光創造研究が、現代社会(巨大な転回の局面 見田 2009:9)が抱える問題に対して何ができるか(**Social Innovation**)を考える。
- キーワード:
 - 他者との出会い、支配の欲求vs.出会いの欲求、システムの充実vs.信頼の構築、コンヴィニアンスvs.コンヴィヴィアリティ、資源とコモンス、ペシャワール会、「仲間」から「みんな」へ、

「出会い」とは？

- 「孤独」と対置される「出会い」
 - = 他者と「つながる」ための出会い
 - cf. コミュニケーションの過剰--「繋がりの社会性」（北田 2005）
- 「出会いそこね」と対置される「出会い」
 - = 「出会いそこね」をのり越える「真」の出会い
 - cf. ポストコロニアリズムの「連累」
（本橋 2005, モリス＝スズキ 2002）
- 「支配」と対置される「出会い」
 - = 自己変容の契機としての出会い
 - cf. 他者関係の二つの欲求の相（真木 2003）

6

他者とつながる契機としての「出会い」

この10～20年の「出会い系」ブーム

- ・テレクラなどの「電話風俗（宮台 2000）」（1985～）
- ・出会い系サイト（1995～）
- ・出会い喫茶（2000～）

「出会い系」の関係性の特徴：

匿名性と親密性（富田英典の“intimate stranger”）

時代背景：

共同体（地域・家族）の空洞化→個人の砂粒化
社会の「学校化」→若者の「第四空間」への流出（宮台 2002）
情報化・消費化→コミュニケーション形態の変容

「出会いそこね」を乗り越える「出会い」

「連累」(implication)というコンセプト

- ・「過去との直接的・間接的関連の存在と、(法律用語で言うところの)「事後共犯 (an accessory after the fact)」の現実を認知する」こと(モリス＝スズキ 2002: 56)
- ・「今の自分が過去や未来と、あるいは他者が生きていた時間と無関係には存在しえない」(本橋 2005: v-vi)という意識

例: 日本の侵略の歴史に対する認識

1. 直接関与していないのだから責任は感じる必要なし
2. 直接関与しなかったが、その不正義の結果生まれた社会で生きている

「植民地主義と戦争暴力による被害と加害の溝、それを埋めることはどのようにして可能なのだろうか。そもそもこの圧倒的な力の差による溝を「埋める」ことなどできるのか。敵と味方に、支配者と被支配者に、生者と死者に引き裂かれた者たちが、つまり、いったん同じ人間として出会いそこねてしまった者たちが、その後の何十年、あるいは何百年にわたる暴力と搾取の年月を経て、ふたたび人間として出会う道はあるのか。」(本橋 2005: iii-iv)

8

「支配」と対置される「出会い」とは？

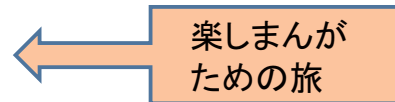
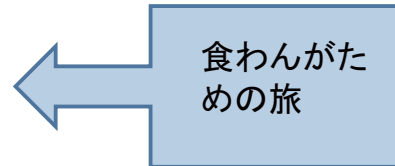
旅とは？その形態は？

旅とは何か？

古代から、どの社会・文化でも見られる人間行動の様式である。

旅の形態 神崎(2005:8-9)

- a. 狩猟・採集の旅
- b. 行商・交易などの旅
- c. 祈祷・遊芸などの旅
- d. 零落・厭世などの旅(漂白の旅)
- e. 巡察・赴任などの旅(公務の旅)
- f. 修業・布教などの旅(悟道の旅)
- g. 登拝・巡礼などの旅(信仰の旅)
- h. 侵略・征圧などの旅(軍事の旅)
- i. 修学・留学(研修の旅)
- j. 遊山・観光の旅



10

「何故人は旅をするのか」に対する予備的考察

ガイドライン

- ・旅とはまさに「生」ること(Life is a Journey)
- ・旅の動機は生への衝動からくる

人間行動の第一の動機 (フロム 1951: 24-25)

- ・生理的欲求(飢え・渴き・睡眠)
 - 満たされない場合は肉体的「死」
- ・精神的欲求(外界と関係を結ぶ欲求、精神的孤独を避ける欲求)
 - 満たされない場合は精神的「破滅」

旅のという人間行動の根源的動機

- ・ 原初的旅の根源的動機: 飢え・渴きという生理的欲求を満たすため
- ・ 観光の旅の根源的動機: 外界・他者と関係を結ぶという精神的欲求を満たすため

私たちは何故「他者」を必要とするか？

「他者」が担う二つの決定的役割

➤「鏡」としての他者：

私たちの自己認識には「他者」が鏡としての重要な機能をもつ
→ 「他者の他者」としての自己

➤「目」としての他者：

私たちは無意識のうちに「他者の視点」を借りて世界を眺めることがある→他者への視点の移行

12

「観光の旅」の動機についての仮定への素朴な疑問

観光の旅の根源的動機：

外界・他者と関係を結ぶという精神的欲求を満たすため



日常生活の中に既に他者は存在し、私たちは外界と関係を結びながら生きているのでは？なのに何故、わざわざ旅に出るのか？



観光の旅は日常生活では得難い
「他者関係」に満ちている

<出会い>

他者関係の二つのタイプ

他者と関係する時に抱く欲求の二つの相

(真木 2003: 216-219)

➤ 他者を**支配**する欲求:

他者は手段もしくは障害であり、他者が固有の意思をもつ主体として存在することは、状況のやむをえぬ真実として承認されるにすぎない(他者を自己に同化することを欲する)

➤ 他者との**出会い**への欲求:

他者の自由とその主体性こそが欲求される(自己をたえず他者へと**異化**することを欲する)



異質な他者と出会うことで自分が変わる喜び

15

観光の旅とは？

なぜ人は観光の旅に出るか？

- 「外界・他者との関係」は二通り:「**支配**」と「**出会い**」。「今ここ」の世界で既にいる他者との関係は、「**支配の欲求**」に方向付けられている関係が圧倒的。
- もう一つの他者関係、すなわち「**出会いへの欲求**」に導かれる外界・他者との関係を人は希求する。
- これを可能にするのが観光の旅である。人は「**新しい他者と出会いたい(出会いの欲求)**」という衝動に駆られて観光の旅に出る。

観光の旅とは何か？

観光は「他者と出会う」ことで自己を世界に位置付け直す人間行動の様式

「出会い(⇔支配)」の研究としての観光創造は、**現代社会**の諸問題の解決へ向けて何が出来るか？

他者関係構築の二つのオリエンテーション

- 「**支配の欲求**」に方向づけられた関係構築
→秩序・規範の遵守(拘束)
- 「**出会いの欲求**」に方向づけられた関係構築
→秩序・規範からの逸脱(解放)

社会問題解決への二つのアプローチ

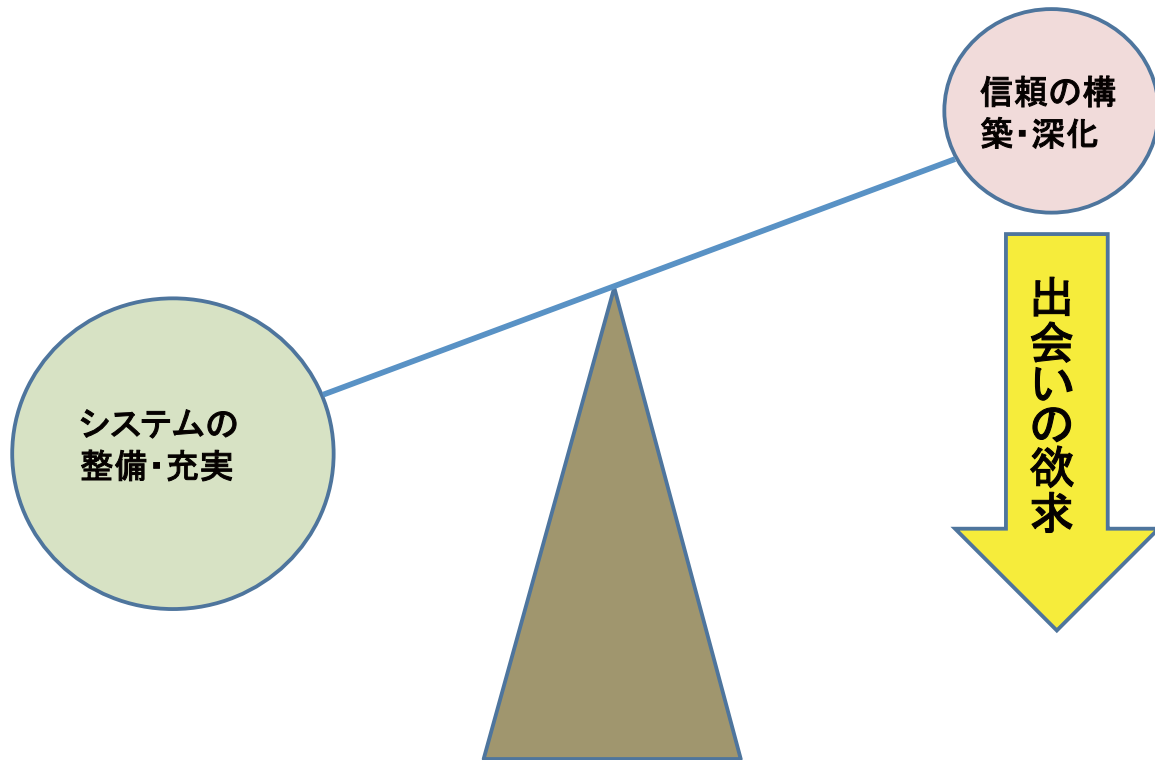
- **管理や規律の強化・システムの整備・利便性**(convenience)
→支配・従属 : システムの内部に住まう人々の発想
- **自由や人権の尊重・他者への信頼・自立的共生**(conviviality)
→出会い : システムの周縁に住まう人々の発想

17

社会問題解決への二つのアプローチ

	問題解決のためのアプローチA	問題解決のためのアプローチB
国際紛争	介入による解決	自立を支援
安全保障	セキュリティの強化	個人の自由の尊重
環境	資源として開発	コモンズとして共同利用
教育	管理・指導の徹底	ゆとりと個性の重視
	システムの整備・充実 ＜支配＞の欲求	人への信頼の構築・深化 ＜出会い＞の欲求

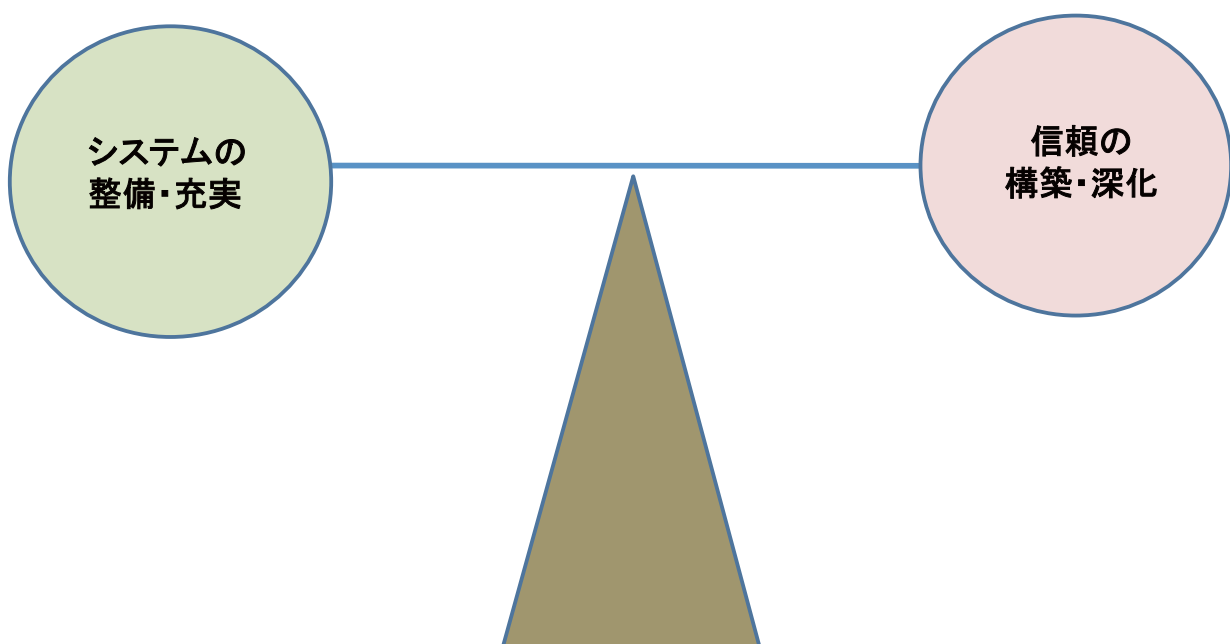
システム整備から信頼構築へ



21

システム整備から信頼構築へ

制度への「期待」から他者への「希望」へ(イリイチ)



| 124

「出会いの欲求」・「他者への希望」を基盤 にした社会構想

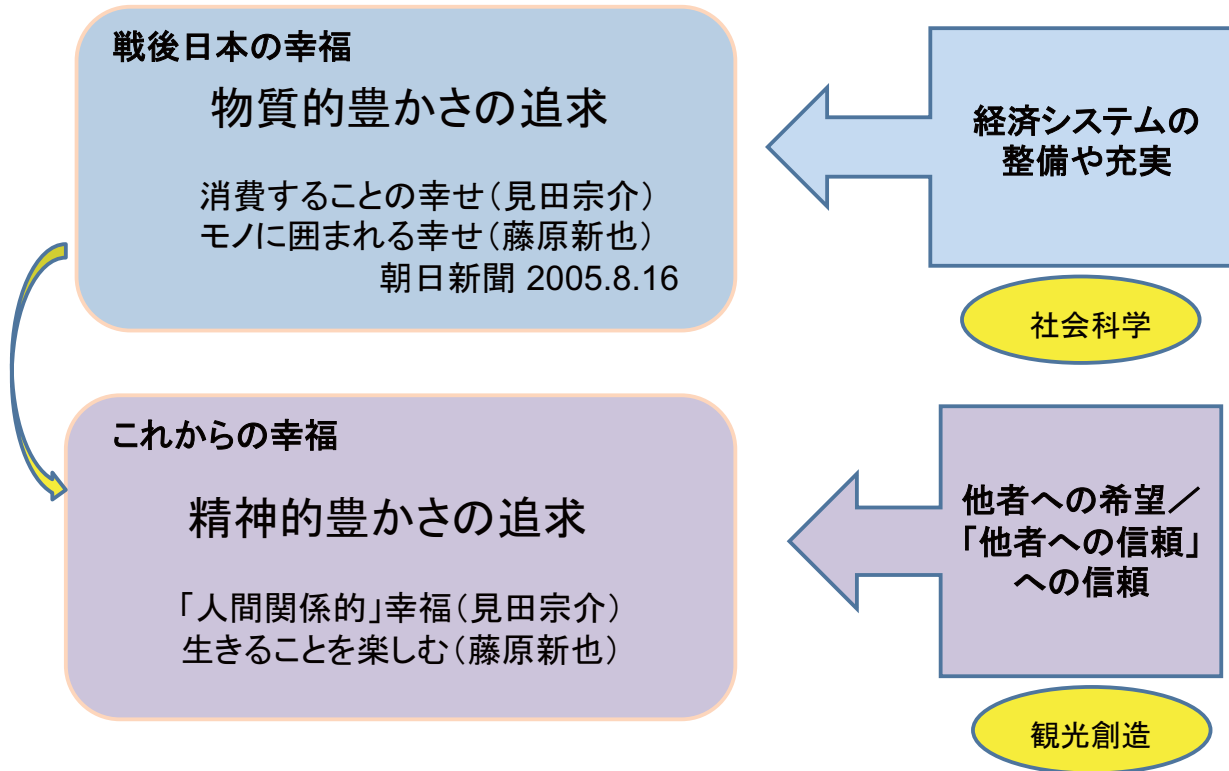
- 理論化や体系化は時期尚早
 - 「他者への希望」は「制度への期待」へ回収されがち
 - 個々の実践の試行錯誤のプロセスを見つめること
- 実践例
 - ペシャワール会・中村哲氏の活動
 - 竹富島のまちづくりと観光
 - 湯布院の平和運動と観光

23

観光創造研究にとって「幸福」とは何か？

「他者との出会い」が私たちにも
たらす幸福とは何か？

幸福とは何か？



27

「幸福とは何か？」この問いは、逆説的にも、失ったものの大きさに比例して深まっていきます。あるいは、他者が失ったものへの想像力の密度に比例して、深まっていきます。

そういう意味で、みなさんにいつも持ち合わせてほしいのは、この《他者への想像力》です。明治期の終わり、1911年に大阪毎日新聞慈善団が発足した折り、当時の毎日新聞社長であった本山彦一さんが語ったこんな言葉を思い出します。「一本の指のうずきは、同時に、全身の苦痛である。社会の一隅に、生活に疲れ、病に苦しむ者の存することは、すなわち、社会全体の悩みでなければならない」と、本山さんは人びとに語りかけました。《他者への想像力》とは、ふつう思いやりと言われますが、要するに**他者を他者のほうから**理解しようとすることです。その意味では、想像力とは、じぶんが抱いているイメージをさらに広げることではなく、じぶんをここではなく別の場所から見る力のことだと言うべきです。

平成23年度 大阪大学入学式 総長告辞

観光創造研究は現代的「他者問題」に どう対処するか？

- 背景1：「大きな物語」の凋落
 - 「他者の他者性」の前景化
 - 島宇宙内部の他者性の脱色
 - 島宇宙の乱立に伴う暴力状況 (宇野 2011)
- 背景2：伝統的共同体の空洞化
 - 「アトム化／砂粒化」の進展
 - 「繋がり社会性」 (北田 2005)
 - “intimate stranger” (富田 2009)

29

現代的他者問題の解決の糸口としての Emmanuel Levinasの他者論 ～オデュッセウスの主体とアブラハムの主体～

- オデュッセウスの主体(全体性を志向する私)
 - オデュッセウス(Odysseus)の冒険: 「未知なもの」に出会い、それを自分の中に取り込み、「より包括的な全体性を構築する」(内田2001:71) 試み
 - オデュッセウスの主体が会う<他者>: 主体にとって同化・吸収の対象である「他なるもの」(l'autre)
 - 「他なるもの」: オデュッセウスの主体が世界を「享受」するための「糧」(nourriture)であり、「他なるもの」は主体とともに一つの全体性を構築する
- アブラハムの主体(無限性を志向する私)
 - アブラハム(Abraham)の神との対峙: : 何の前触れもなく名指されて故郷を棄てること、そして息子を生贄にささげることを神から命ぜられる
 - アブラハムの主体が会う<他者>: 「他なるもの」でなく、「絶対的に他なるもの」(l'absolument autre) すなわちレヴィナスの意味での「他者」(Autrui)
 - 「他者」: 「私はこの人を認識することも知解することもできない」という無能の覚知に至るときはじめて「他者」は私の前にその姿を現す(内田2001:78)

＜参考文献＞

- イリイチ、イヴァン(1991)『生きる思想---反=教育/技術/生命』藤原書店
- 内田樹(2001)『レヴィナスと愛の現象学』せりか書房
- 宇野常寛(2011)『ゼロ年代の想像力』ハヤカワ文庫
- 大澤真幸(2008)『不可能性の時代』岩波新書
- 北田暁大(2005)『嗤う日本の「ナショナリズム」』NHKブックス
- Giddens, Anthony (1991) *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Stanford Univ. Press. (『モダニティと自己アイデンティティ---後期近代における自己と社会』秋吉美都, 安藤太郎, 筒井淳也訳, ハーベスト社, 2005)
- 神崎宣武(編著)(2005)『文明としてのツーリズム---歩く・見る・聞く、そして考える』人文書簡
- フロム、エーリッヒ(1951)『自由からの逃走』(日高六郎訳)東京創元社会
- 真木悠介(2003)『気流の鳴る音---交響するコミュニオン』ちくま学芸文庫
- 見田宗介(1996)『現代社会の理論---情報化・消費化社会の現在と未来』岩波新書
- 見田宗介(2006)『社会学入門---人間と社会の未来』岩波新書
- 見田宗介(2009)「現代社会はどこに向かうか---世界の有限という真実・＜持続する現在＞の生へ」『朝日ジャーナル・創刊50年』
- 見田宗介・大澤真幸(2009)「名づけられない革命をめぐる---新しい共同性の論理」『atプラス 02』大田出版
- モーリス=スズキ、テッサ(2002)『批判的想像力のために---グローバル化時代の日本』平凡社
- メンツェル、ピーター(1994)『地球家族』TOTO出版
- 本橋哲也(2005)『ポストコロニアリズム』岩波新書
- 山田義裕(2008)「他者と出会う---支配の欲求から出会いの欲求への転回」石森秀三編『大交流時代における観光創造』北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 研究叢書70, 249-266